

## 磯部尺山子の人と作品

大島麥邨

### 従軍中の俳句

寒月や國の心に一所断

聖戦に筆と剣や去年今年

(聖音放)  
送自失  
あしつくび脳天地虫に鳴かれゐし

磯部尺山子（覚太）は明治三十年、群馬県伊勢崎市に生まれた。大正八年、親戚の大塚保治を頼り上京し、その紹介で川合玉堂に師事して画業に専念し、昭和九年、帝展の特選の栄に輝いた。

大塚保治は夏目漱石と帝大予備門から同窓で、夫人の楠緒子は小説を漱石に学び、文筆家として活躍したが、明治四十三年、三十五歳で逝去した。友人総代として漱石が「悼亡　ある程の菊投げ入れよ棺の中」の弔句を贈っている。

大枯れの富士を繪にする二月かな

鏡して自畫像描く二月かな

尺山子

おもかげや秋草語るラジオの師  
おん声のすこやか祝へ菊膾

秋雲や翁の御影師の御影  
師の御影追へば千里や秋の暮

尺山子

尺山子は昭和十九年、陸軍少尉として応召し台湾に転戦した。第二句は、時局が切迫したのを予感してか、等身の二倍大ほどの、端然と正座した凜々たる自画像を描いたときの句である。画業は作者の投影であるとして自己を律する厳しさが魅力であり、且つ懽仰される所以である。

いる。

尺山子の第一句は、最も自然が枯れ切った真の姿を写さんとの心意気であろうか。絵師として富士と正対し描くことは、その力量を問われることである。日本畫人伝の著者、難波專太郎は、尺山子を横山大観に勝るとも劣らない画家として推奨して

「おもかげ」「おん声」の句は、昭和二十八年、城師がNHK俳句講座に使う花野の俳句の集録に榛名高原を散策したラジオ放送を拝聴しての句と思われる。

尺山子は、田島群峯（渋柿前橋支部の重鎮）が黄綬褒章を受

章した際、「君が家の蘭黄白の菊花かな」を祝句として贈り、また、令息、田島弥太郎が学士院賞を受賞した際も「風光れ御道の峠又峠」を祝句として贈っている。

(谷川) 山を説く雪焼け顔や神々し  
雪嶺へ一筆三札血や沸る

(倉沢) 冻霧晴るや覗きごころに仰ぐ倉  
余花に憩ふや昔旅人清水越え

奥利根支流、湯檜曽川沿ひに峠道が続き、はるか谷底を潺湲と渓流が奔つていて谷川岳での取材の句である。「一筆三札」、美神に対する絵師の畏敬、敬虔の念が窺われる。

尺山子が朴の花を描いた墨彩画の名作があり、それに漢詩の讀がつけられている。

本是深林幽谷花 折來一枝瓶裏斜  
可憐良夜青燈下 楚々漂香不自誇

本より是れ深林幽谷の花。折り来りて一枝瓶裏斜めなり。憐れむ可し良夜青燈の下。楚々として香りを漂わし自から誇らず。

毛の原は桑解く頃や陽炎へる

新芋や父を描かば野良姿  
健やかなほの夏蚕と帰省子と

尺山子

大師恋ふは母恋ふことよ花の雨

孝心の篤かつた尺山子は、常に家郷を、また年老いた両親のことが頭から離れるることはなかつた。篤農家の父。少年の頃、暑中休暇の帰省の折の母が飼う夏蚕。みんな懐かしい思い出になつた。映画のワンシーンである。「大師恋ふは」に到つては、母を慕う詩人の至情そのものである。

尺山子

秋風やいかな動かぬ山の大

伊香保觀山荘の庭にある、秋風句碑を拝して  
山の大きいさ詩の大や風薰る  
万感をこめての敬慕・懷旧の句である。

東洋城

訪朔太郎碑  
故郷や石のつぶての空<sup>ツ</sup>風  
風花の頬や伝はる熱きもの  
詩碑の胸古外套の胸と距離  
朔太郎恋し空<sup>ツ</sup>風なほ恋し

尺山子

前橋市敷島公園に、萩原朔太郎の帰郷の詩碑がある。失意の中に二児を連れての帰郷の詩碑に対し、自からも逸民草丘の号を用いたことのある尺山子は、特別な親近感をもつて、碑に対した。空ツ風が乾き切った小石混りの砂を容赦なく吹きつける。朔太郎は軍国主義とは相容れず、その声価は戦後に譲ることになる。

尺山子は昭和三十六年四月七日、四国八十八ヶ所靈場巡りに吉野仏旅と同行し、句画一巻を残している。

小走りに一寺打ちけり春時雨

険されど同行二人や春の雲

後生には汝も御仏や花風

鈴の音も誰彼もなや風薰る

一日に数ヶ寺を礼拝し、句画を走り書きしながらの旅は、かなりの苦行であつたと思われる。

句集、『氷炭』、『続氷炭』<sup>(注)</sup>

昭和三十二年、尺山子の還暦祝として、句集『氷炭』の刊行が同人有志によつてなされた。跋文は現主宰の先代凡草氏が執筆している。要旨は「草丘画伯は日本画壇の巨峰であるばかりでなく、夙に東洋城先生に師事し、芭蕉精神の大道を歩む豪宕な俳人であり、尺山子君の孤高清冽な佳什は大炬火となることを確信し、今回の運びとなりました。……」と述べている。また、昭和四十七年、句集『続氷炭』も刊行された。

前橋支部開設十周年を記念して、句集『どどめ』が刊行されたが、その際、「菖蒲打やどどめどんぐり兄弟」の祝句を寄せている。なお『どんぐり』が栃木支部で、三十五年に刊行されているが、装丁は共に尺山子の淡墨の句集にふさわしく上品な句集である。

#### 句碑について

昭和五十八年一月十日、伊勢崎華蔵寺公園の一角に大きな句碑が建立された。赤城安山岩の高さ一・五、横一・八米、俳句と漢詩が刻まれている。

尺山子

埋火や絵の道行けば逢ふ大雅

川合玉堂に師事し、画業に励んだ尺山子は、池大雅にも強く惹かれるのだった。大雅は、大和絵、土佐絵、北画、南画等を、広く涉獵した江戸時代の画家である。碑面左上に漢詩一篇、

赤峰刀水夕陽斜めなり

一径靄然として故家に通ず

紫堇蒲公春満目たり

郷心此れを喜ぶ舊知の花

歸省途上作 艸道人とある。

なお、尺山子には他に尺山丈草居漢詩抄一巻がある。

(注)『氷炭』および『続氷炭』の抜粋は、本誌五〇頁および

五六頁に掲載。